

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0970300414		
法人名	有限会社 栃木ケアーズ		
事業所名	栃木ケアーズ グループホームほほえみ館		
所在地	栃木県栃木市箱森町19-34 電話 0285-25-0550		
自己評価作成日	平成 24年1月11日	評価結果市町村受理日	平成 24年 2月 27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	ナルク栃木福祉調査センター		
所在地	栃木県宇都宮市大和 2-12-27 小牧ビル3F		
訪問調査日	平成 24年 2月 8日	評価確定(合意)日	平成 24年 2月 27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

建物の構造上エレベータで1Fまで下りている。入居者に閉塞感のないように建物の外に出る様に外出に力を入れている。市民農園を借りて季節の野菜を作ったりしている。収穫祭では何時も金賞や優秀賞を頂き励みになっている。外出は季節のお花見梅を初め桜ふじハスといく。夜の夕食時にはホテルイルミネーションを楽しんでいる。栃木市のお祭り、雛まつりにも参加している。楽しい想いを少しでも多くを考え、季節の行事は昔の慣習を、入居者に、教わりながらする。ターミナルケアーにはご家族、協力医、看護師、スタッフがー丸となって、取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

幹線道路や商店が近く利便性に恵まれた処に立地し、平成15年に開設された、3階建ての2~3階を使用した2ユニットのグループホームです。食材や日用品は地元の商店で仕入れ、また自治会の要請で認知症に関して講演会を開いたり、事業所の納涼祭に敬老会、育成会を招待し入居者手作りのプレゼントを贈るなど地域と連携している。事業所は入居から看取りまで安心して暮らし続けられる様に入居者・家族と看取りについても話し合い、延命治療や緩和ケアについて講義した。職員は看取りを体験し、入居者への尊厳と優しい気持ちを一層抱くようになった。災害避難訓練では、消防署のアドバイスを受けた。避難訓練を家族にも見学してもらい、入居者の安全確保のため今後は避難訓練回数を増やすなどに理解を求め同意を得ている。事業者・職員は行政、地域、家族と緊密に連携をとりながら、更に入居者のサービス向上に取り組んでいる事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します(さくら)

さくら		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果(さくら)

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は地域密着型サービスを踏まえ共有して実践につなげる様に努力している。	認知症介護を意識してグループホームの理念を作成した。理念は職員や訪問者が目に付きやすい通路に貼り出している。職員は個々に業務を振り返りながら理念を黙読している。職員は朝夕の引継ぎ時や、入居者の様子など振り返り、話し合う中で理念を共有、し日々新たな気持ちで実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入っている。近くのコンビニやスーパーに買い物に行ったり行事などにも参加している。	管理者は箱西自治会の要請で地域住民に、認知症や事業所の機能・役割について講演した。食材や日用品も地元のスーパーや商店を利用するなどして、関係を大切にしている。事業所の納涼祭には地域住民や敬老会・育成会を招待したり、ゲストで相撲の大鳴門部屋の力士が「チャンコ鍋」を振るまうなど、交流の継続に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会の要請もあり講演会を自社で開催。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ほほえみの行事や日頃の入居者の様子を報告したりご家族や出席者からご意見を頂いたりする。	運営推進会議メンバーは柔軟に考えている。入居者・家族・自治会長、包括支援センター、民生委員などのメンバーに、議題を事前に案内して開催している。入居者の介護状況や、行事、災害避難、看取りなどについて報告している。会議には家族の出席も多いことから、医療処置・延命治療や看取りについて講義や説明し意識を喚起している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域運営推進会議には必ず参加して下さっている。介護は県の更新手続きをしている。まごころ新聞や会議録を送付している。	運営推進会議に包括支援センターが出席している。各種申請や相談に訪問したり、関係部署に運営推進会議議事録や機関紙を届けるなどの現状報告をしてアドバイスを得ている。管理者は県認知症介護の指導員であり、講演会や、実習生の受け入れなどの相談もある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	充分理解はしている。エレベーターを使うのが上がり下がりなので閉塞感のないように日々工夫はしている。	身体拘束の弊害について職員は正しく理解している。現在、転倒による骨折の事例があり事業所は報告書を提出し、対策会議の結果から協力医や家族と問題解決に向け話し合い、生活目標プランを見直した。共有の居間にベッドを持ち込み職員はプライバシーに配慮しながら、他の入居者の見守りの中で、孤立感がないように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待はありえない関連法は学んでいる。スタッフは入居者を大事に思っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度は理解しているが活用の必要性はない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に説明をした上で、ゆっくり、目を通していただくため、一度持ち帰って契約時に疑問点がないか、伺う。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月一回の会議に、意見を聞くようにしているが気がついた時その場で決める事もある。	運営推進会議や事業所のイベントに可能な限り、全家族の出席をお願いし、家族の意見を表せる機会を作っている。外部評価結果を全家族に配布したり、運営やサービスの改善・提案や協力などに家族アンケートをとるなどして、家族の意見を反映させるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	その様に望んでいる。職員の雰囲気は良い。	月一回施設長・管理者・ホーム長・全職員でケース会議が開かれる。問題・提案・対策について自由に話し合われている。管理職と職員は、日頃に置いても忌憚の無い意見や提案が出来る雰囲気である。資格取得に関する研修や、昼食費・食事会などについても代表者の理解がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	グループホームらしい雰囲気の中で楽しいが給与は安い。やりがいは感じている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内研修を行ったりはしている。外部の研修近づくに難しいのが現状。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近くにグループホームがあるが交流は難しいが、情報は流している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	スキンシップを大切に入居時に寄り添いケアをしながらか本人の思いを掴むようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族が、困っていたことは情報として頂くが、連携を取り合って関係作りを構築する。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込み相談にいらしたときそのときの必要としている他の介護保険のサービスの説明をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者から生活の知恵を学んだり暮らしの慣習を教えられたり考えたりしている。また入居者同士の関係も出来ている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族との絆は強くなっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今までの友人が訪問に来ている。	入居者は状態の変化に伴い、馴染みの人や場所が疎遠になる傾向にあるが、職員は入居者の生活歴や家族からの情報を基に支援している。家族にも墓参りや近所の人に会えるように、協力と理解を求めたりして、馴染みの関係継続を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとり孤立する事もなく車椅子を押してくれたり座る場所の判らない人に教えたりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご本人の 葬儀には職員全員出でてご家族の、精神的な支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	コミュニケーションを10時、15時入居者の一人ひとりと、とりながら希望や要望を把握していく。	職員は暮らしの中で見守りや、寄り添いを通して、入居者の思いや意向を察したりして把握している。楽しみなおやつの中には、入居者一人ひとりと会話をしながら、表情や動作などから思いや意向を聴き出している。困難な場合には職員で話し合い本人本位に検討するように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	寄り添う事により把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の申送りを聞いたり、ケース記録接する事により把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員全員で1ヶ月に一度ケース会議を行い反映している。	アセスメントシートから介護計画案を作成し、月1回のケース会議で情報を持ち寄り見直している。カンファレンスのマンネリ化を防ぐために、「ひもときシート」を使って課題を具体的に抽出し、課題解決を図り介護計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録を24時間記録して共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	外出時も付き添いや医療業務がある時グループホームの看護師がいない時デイサービスやケアマネージャの看護師の応援がある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コンビニ、スーパー、運動公園、緑地公園、図書館等。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	健康管理のため、協力医の内科の先生には毎週往診をお願いしている。整形外科は月1回の往診。入居者全員協力医がかかりつけ医となっている。	入居者の健康管理や家族の負担軽減について入居者・家族と話し合い、協力医の受診を支援している。協力医の内科医は週1回、整形外科は月1回の定期往診があり、入居者の健康と、家族の安心に繋がる支援をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員は入居者の不調や変化を看護師に伝え相談して受診したりする。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	この一年入院はない。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期のご家族の意向は聞いている方もあるがターミナルになったら主治医、ご家族、施設長、管理者、ホーム長との間で話し合う。	入居時に本人・家族に「重度化した場合の対応に係わる指針」を作成しており、説明している。また入居者の状態の変化に合わせて協力医の指示を仰ぎ、入居者・家族に思いや意向を再確認している。職員はターミナルケアについて内部研修を受け、実践に繋げている。職員は看取りの経験から入居者への思いや、優しさが強まっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ほぼできる。主治医、看護師の指示は、何時でも可能。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中はご近所の協力は取り付けているが夜間は厳しい。避難訓練してひなんの手順は職員理解している。スプリンクラー滑り台は完備。	立地条件や構造的な問題を精査して災害に向けた対策が検討されている。積極的に町内や近隣との絆を強化し理解を深めている。避難訓練では消防署からアドバイスがあり、また入居者の避難訓練を家族に見学してもらい理解をしてもらった。入居者の避難誘導には、光・音など全ての手段を駆使して対応をとることにしている。	入居者の状態の変化に伴い、避難経路への誘導など益々困難が想定されることから、入居者が避難経路を知覚する為に、避難訓練回数を重ね、経路歩行が習慣化することも期待されます。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	対応出来ているとは言えない部分がある。ADLが下がっている人でプライバシーを守ってあげられない部分がある。	職員はプライバシーに関して最善の配慮をしながら支援している。入居者にADLの低下があり安全面の観点から、家族と相談して居間にベッドを持ち込んでいる。居間の入居者のプライバシーに触れることは職員の気配りで、損ねないようにしている。居間の入居者は、他の入居者に囲まれ、職員の見守りの中で安心して平穏に生活している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定の出来る人は尊重している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にしたいが職員のペースに乗せる必要もある。	一人ひとりのペースを大切にしたいが職員のペースに乗せる必要もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	理美容は2カ月に1回楽しみにしている。洋服も自分でコーディネートしている人もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と職員と一緒に出来る時はする。片付けも、お茶碗拭きは、当番制にしている。	入居者は職員と食材の買出しや、市民農園で収穫した野菜の下拵えなど、出来る範囲で手伝い参加して愉しんでいる。卵焼き・おにぎりの得意な入居者もいる。食後の食器拭きなど経験が活かされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量は毎食記録している。水分量は少ない人多い人は記録を撮って調節している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立している人介助の人がいるが夜は、全員一人ひとりするのを確認している。入れ歯はスタッフが夜間洗浄する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中はオムツは使用していない。自立の人がおおい。介助の人よりハパンで誘導。	入居者個々の排尿・排便回数表を念頭に、寄り添いや見守りを通して、声をかけながらトイレでの自立排泄を支援している。夜間ポータブルの入居者もいる。入居者は意思表示が出来る場合が多く、パットなど自ら使用する物を選択している入居者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳やヨーグルト食物繊維が含まれているものを食べている。体操も取り入れている。記録を取っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ADLの高い人は1週3回低い人は1週2回。時間は午後13時～15時頃	普通浴槽と機械浴槽があり、入居者のADLと健康に配慮して個々に使い分けている。入浴は週2～3回午後から入浴している。職員は二人体制で安全を確保しながら、心地良い入浴を支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床時間就寝時間はそれぞれのペースに任せている。室温の調整はこまめにしている。布団は除菌乾燥をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	隔週に薬が出る。処方栓にて用法用量副作用を掴む。薬の変更時には症状の観察をして行く。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴の知恵は学ぶ事がある。役割分担の出来る人にはしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出支援は、日中に限らず楽しめるところ、珍しい興味の持ちそうな所によく行く。	気候や入居者の状態を見ながら、買い物や市民農園での作物の手入れや収穫などに出かけている。毎年花見の梅・桃・さくら・菖蒲・藤や菊祭りなど外出の楽しみを支援している。チラシや広報誌などの情報から入居者・家族に意見を求め、今回は家族同伴で那珂川苑1泊旅行に決まり楽しみにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金に興味を示さない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は本人の希望があれば何時でもする。年賀状暑中見舞いは、支援しながら出す様になっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日にちが判る様に献立板に日付を入れたり毎月のカレンダーは、その月に関係あるものを、折り紙で作ったりする。	廊下には入居者の、行事参加の様子や「まごころ」新聞など掲示してある。居室からリビングは回廊でトイレは緩やかなスロープになっており、機能訓練や歩行訓練になり、入居者の自立支援に繋がっている。日中大半はリビングで過ごし、窓から、季節毎に変る日光連山の変化を愉しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下のベンチで利用者同士語り合っている。またリビングのソファやキッチンで、静かに一人過ごす人もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた布団お茶碗等持参して頂く。本人が、自分の部屋と認識出来るように表札なども掛けている。自分の部屋で過ごす人もいる。	居室は各部屋ベランダ付きで日当たりが良い。入居者は家族の写真を飾ったり、使い慣れている日用品やテーブルなど持込み、居心地良く暮せるように工夫している。各部屋は収納庫が備わっており、地震でも落下物などの心配がなく安心である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自立支援は大切に、している。バリアフリーでない部分一人ひとりの能力に合わせて、見守りをしたりリハビリになったりしている。		